Suicidal behavior among homeless people in Japan
（日本のホームレスの自殺行動）

Tsuyoshi Okamura・Kae Ito・Suimei Morikawa・Shuichi Awata (2014)

現代の日本は、バブル崩壊後の長期不況による金融危機以来、年間自殺者は 3 万人を超えており、1 日当たり 80 人以上が自殺している。福祉受給者の自殺率は一般人よりも高く、複数の先行研究から、自殺の意思に対して、心理的苦痛にはプラスの効果、社会的支援の認知にはマイナスの効果を持つことが示され、ホームレスの退役軍人を調査したところ、自殺行動が精神障害及び薬物乱用の歴史と相関していることが発見された。しかしながら、ホームレスの自殺行動に関する研究はほとんどといっていいほどなく、そこで本稿は、福祉受給と関わりの深いホームレスと自殺行動の相関関係を調査している。

調査は、東京の 2 つの地区で対面による聞き取り調査で、被験者は 423 人（うち女性 31 人）、平均年齢 60.6 歳。約 20%が路上生活者であった。質問項目は、「過去 2 週間、何度も死にたいと思いましたか。」「過去 2 週間、何度も自殺を考えましたか。」「過去 2 週間、自殺の計画を立てましたか。」「過去 2 週間、自殺を試みましたか。」の 4 つである。変数は主に 3 に分かれ、社会人口学的変数（性別や学歴、雇用など）、身体的健康関連、精神健康関連である。例えば、上記の 4 項目すべてがうつ状態のリスクと関連しており、「病院に連れてってくれる人はいますか。」の項目が自殺意思と関連していることが分かった。

統計分析は、一変量ロジスティック回帰分析を行って、自殺行動と説明変数の相関関係を調べた。またうつ病とは無関係の影響を調べるために、うつ病を制御した後に多変量ロジスティック回帰分析を行った。P 値は統計的に有意とみなした。

分析結果は、ストリートホームレス、困っているときに話し相手がいる、が統計的に有意な変数であった。また、主観的健康状態の認識が悪い、視覚障害、乏しい精神的幸福感は近年の自殺意思と強い関連を示した。調査結果としては、参加者の 17.7%が一生の間に自殺を試みたと回答していた。

街路のホームレス、感情的な社会的支持の欠如（困ったときに話し相手がいない）、および現在の不況は、日本のホームレスの人々の最近の自殺念慮と著しく関連していた。
ホームレスが自殺するのを防ぐための効果的な戦略として、住宅支援、社会的支援、そして精神ケアのサービスを提供する包括的な介入が不可欠かもしれない。